

2022年度の琵琶湖における餌料プランクトン生息量

森田 尚

1. 目的

アユ等の餌料生物として重要な甲殻類プランクトンの2022年度の生息量を評価する。

2. 方法

毎月中、下旬に彦根港と安曇川河口を結ぶ線上の5定点で、目合95 μ mの北原式定量ネットを用いプランクトンを層別採取し、種類別に個体数を計数した。分類群ごとに個体数密度(個体数/ℓ)を求め、stn.1(0-5m)、stn.2(0-10m、10-20m)、stn.3(0-10m、10-20m)、stn.4(0-10m、10-20m)、stn.5(0-5m)の8層分の個体数密度の合計値を生息量指標値とした。

3. 結果

図にノープリウス期幼生、ケンミジンコ類コペポディド期幼生+成体、ダフニア属、ゾウミジンコ属、オナガミジンコ属の生息量指標値の季節変動を、過年度6か年との比較で示した。2022年度のケンミジンコ類コペポディド期幼生+成体が過年度と比較して多い状況がほぼ継続的に見られた。ダフニア属は変動が大きく4月下旬~5月中旬、8月中旬、10月下旬~11月下旬に増加ピークが見られ、11月中旬のピーク時には過年度の同時期と比較して最大値を示した一方、前年度の12月下旬~4月中旬と8月下旬~9月下旬、1月中旬~には、それぞれ過年度の同時期よりも低い値で推移した。ゾウミジンコ属は過年度の平均

値レベルで推移したが、11月中旬~12月中旬は過年度の同時期と比較して著しく低い値で推移した。

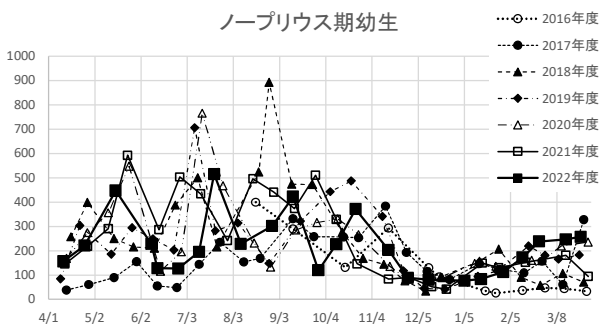
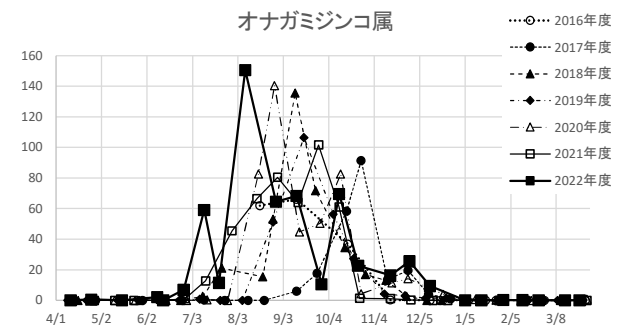
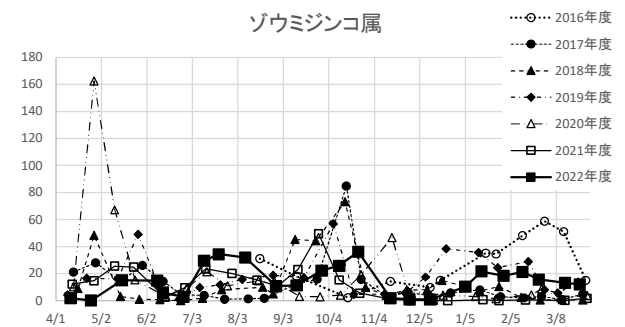
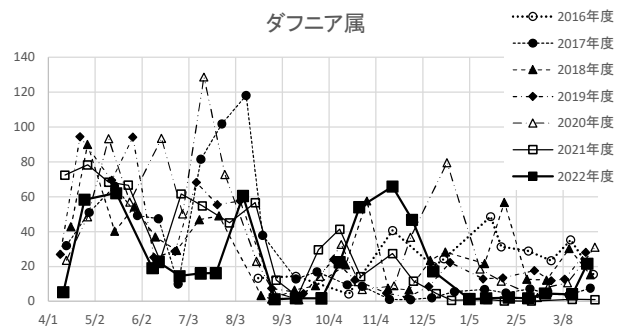
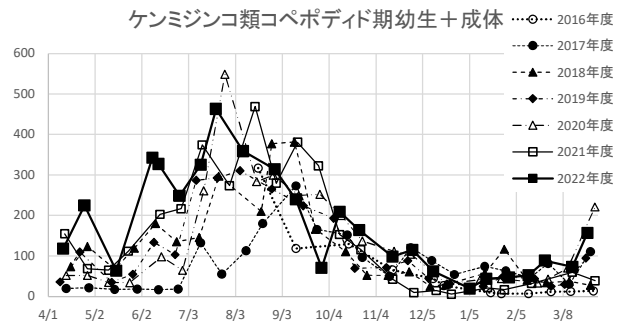


図 各分類群の生息量指標値の推移